

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06298

研究課題名(和文) 中央アジア出土胡語・漢語文献との比較によるトゥムシュク語文献の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive study on Tumshuqese documents in comparison with non-Chinese and Chinese documents unearthed in Central Asia

研究代表者

荻原 裕敏(Ogihara, Hirotoshi)

京都大学・白眉センター・特定准教授

研究者番号：60762135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：中世イラン語に属する言語であるトゥムシュク語による文献は、中国・新疆ウイグル自治区のトゥムシュク地域を中心に、東のクチャからトゥルファンに到る地域で資料が発見され、現在ドイツ・フランス・イギリス・ロシア・中国に所蔵されているが、これらの文献の内、特にこの言語の言語構造解明に際して重要な位置を占める世俗文書の原文書調査を行うと共に、新たに作成したコーパスに基づいて、トゥムシュク語の言語構造の解明を行った。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed at a philological study on Tumshuqese documents unearthed in the vast area from Tumshuq to Kucha and Turfan in the Xinjiang Uygur Autonomous Region in China. They are now housed in libraries and museums in Germany, France, England, Russia and China. Among Middle Iranian languages, Tumshuqese is poorly researched because of the paucity of its documentation. Although the secular documents in this language occupies the important status in this field, a comprehensive research on them has never been offered. For two years of this research project, all the Tumshuqese secular documents were researched. This corpus thoroughly revised during these two years can contribute to the better understanding of the linguistic structure of this language.

研究分野：中央アジア出土写本(特にトカラ語)

キーワード：トゥムシュク語 中世イラン語 歴史言語学 古文書学 中央アジア史

1. 研究開始当初の背景

(1)中世イラン語に属し、言語学的にはコータン語と最も関係が近い点が指摘されているトゥムシユク語の資料は、中国・新疆ウイグル自治区のトゥムシユク地域で主な資料が発見されているが、1935年に解読が提示されてから、極少数の研究者の努力によって、基本的な言語構造が解明されてきた。この言語の比較的材料とまとめた資料は世俗文書であり、これらの文書中に在証される漢語からの借用語や漢籍史料の記述から、文書の年代は7-8世紀頃に比定されている。

(2)ドイツのマウエ博士によって、従来音価が不明であった、或いは誤って推定されてきたブラーフミー文字の内、いくつかの文字について、古代ウイグル語を表記するブラーフミー文字を参考にして、従来とは異なる音価が推定されると共に、2009年には、この時点において知られていた全てのトゥムシユク語資料のローマ字転写がインターネット上で公開され、研究者の利用に供された。

(3)研究代表者は、トゥムシユク語資料と同じ地域で発見され、尚且つトゥムシユク語にも影響を与えた事が知られているトカラ語文献の文献学的研究を専門としているが、一部の資料がトカラ語から翻訳された事が指摘されており、またこれまで知られていなかった複数のトゥムシユク語資料の解読・研究に従事した事を機に、マウエ博士によって提出された新しいローマ字転写に基づいて、当該言語の言語構造を全面的に再検討する必要性を認識した。

(4)先に触れたように、この言語で書かれた文献の内、言語構造解明のためのコーパスとして、ある程度まとまった文脈を回収できる文献は世俗文書であるにも拘わらず、他言語による資料と比較対照が可能な仏典に基づいた文法研究が主流であったため、これら世俗文書の研究は比較的遅れた領域に属していた。研究代表者が扱った新しい資料の殆どが世俗文書であった事から、既知の世俗文書も含めて、これらの資料を体系的に研究する必要性を認識するに至った。

2. 研究の目的

(1)本研究は、資料が零細であるため、他の中央アジア出土胡語文献と比較して、研究が格段に遅れている中世イラン語に属するトゥムシユク語文献を扱う。この言語で書かれた資料は中国・新疆ウイグル自治区のトゥムシユク地域を中心に、東のクチャからトゥルファンに到る地域で発見され、現在ドイツ・フランス・イギリス・ロシア・中国に所蔵されているが、とりわけその大部分を占める世俗文書は翻訳文献ではなく、解読の手がかりを与える他言語による原典を欠いていたため、この言語の研究では利用される事が少な

く、体系的な研究が待たれていた。これら世俗文書を中心に、トゥムシユク語の原文書の網羅的調査を行い、基礎資料であるコーパスを確立する。

(2)原文書調査によって得られたコーパスを利用して、他の中世イラン語の言語形式を参照すると共に、他言語からの借用語の可能性も考慮に入れて、トゥムシユク語の言語構造を再検討する。

(3)上記(1)で記した研究状況に鑑み、特にトゥムシユク語によって書かれた世俗文書を、時代・地域を同じくする他言語資料と比較する事によって解読を進め、トゥムシユク地域の言語・歴史・宗教・文化を再構成する。

3. 研究の方法

(1)ドイツ・フランス・イギリス・ロシア・中国の各所蔵機関を訪問し、トゥムシユク語文献の原文書調査を行い、研究の基礎であるコーパスを確立する。特に、仏典とは異なり、世俗文書は草書体で書かれており、公開された写真に基づいた解読には困難を伴うため、原文書に当たっての調査が不可欠である。

(2)完成したコーパスを利用して、コータン語・ソグド語・トカラ語・古代ウイグル語・漢語・バクトリア語などといった時代・地域を同じくする他言語資料との比較研究を進め、内容の比定及び平行箇所を確定を行い、在証される言語形式を解釈する。ただし、この言語を書き記すために用いられたブラーフミー文字は、語を分かち書きする事がなく、外見上、語の切れ目を判断する事ができない事から、先行研究での分析が正しいとは限らず、改めて言語構造全体の再検討を行う必要があるため、他の文書に現れる形式や同系言語である他のイラン語との比較及び借用語の確定も同時に進める。一方、借用語や他言語資料中の平行箇所は、言語接触や言語文化交流の手がかりを提供するため、これらの確定を重視する。

(3)上記の他言語資料との比較を通して、トゥムシユク語の言語構造及びトゥムシユク地域の歴史・宗教・文化等の研究を行い、中央アジアにおける東西文化交流の観点から、当該地域での言語文化の接触・融合の実相を解明する。

4. 研究成果

(1)二年間の研究期間を通して、ドイツ及びロシア所蔵のトゥムシユク語世俗文書全点合計 21 点の調査を行った。極一部の文書を除いて、これらの資料は写真版に基づいたローマ字転写のみが提出され、研究に利用されてきたため、当初より原文書調査を本研究の主目的としていた。フランス・中国所蔵の世俗文書については既に調査を終えており、イ

ギリスにはトゥムシユク語の世俗文書は確認されていないため、現在知られているトゥムシユク語世俗文書の全ての調査を終えた事となる。

①ドイツ所蔵のトゥムシユク語世俗文書については、研究初期に出版された7点を除いて、図版に基づいた転写が公表されているが、今回の原文書調査によって既公表の転写に対して多数の修正を行う事ができた。

トゥムシユク語によって書かれた資料は点数が100点に及ばず、また多くが零細な断片ではあるが、状態の良いものの殆どが世俗文書であるため、この言語の言語構造の解明には世俗文書の解読が欠かせないにも拘わらず、これらの文書について、原文書に基づいたコーパスが提示されていなかった。本研究中に行った調査によって、先行研究で提出されていたローマ字転写には多数の修正が必要である事が明らかになった事は、従来研究の資料として利用されてきたコーパスに改訂が必要である事を示しているだけでなく、先行研究で提出された内容についても再検討の余地がある事を示している。現在、調査で得られたコーパスを利用して、トゥムシユク語の言語構造の再検討を行っている。

調査を行ったドイツ所蔵のトゥムシユク語世俗文書の内、二点が同一の文書に属し、尚且つ直接接合する事が明らかになった。当該の二点の文書は既に転写及び写真が公表されているが、翻訳や具体的な内容の分析は行われていなかった。以前、研究代表者が共同研究を行った新発見のトゥムシユク語契約文書の分析のために、同種の文書の書式を他言語のものと比較した際、これら二点の文書の書式が連続した内容を有している事は明らかであり、接合する可能性も認識していたが、原文書を確認していなかったため、その可能性を指摘する事は控えていた。今回の調査によって、文書のサイズや形状及び紙質などと言った古文書学的情報を収集する事ができた結果、これら二点の文書が直接接合する事が明らかになった。接合された文書は、前述のマウエ博士による编号では HL13 及び HL33 の二点であり、この接合の結果、この文書について文書冒頭の紀年から契約の証人に関する記載までを留めている事が明らかになった。

(2)フランス所蔵トカラ語(大部分がトカラ語Bのものであり、またはクチャ語とも称する)断片中、これまで知られていなかったトゥムシユク語世俗文書断片を1点、またドイツ所蔵サンスクリット断片中にトゥムシユク語による書き込みを伴うもの1点を発見し、論文として出版した。[論文①]

①研究代表者はフランス所蔵トカラ語断片

を調査している際、トゥムシユク語で書かれた世俗文書断片を1点発見した。発見された当該の文書は、整理段階で断片に附された紙片の記載によって、クチャの仏教寺院址として知られるドゥルドゥル・アクルで発見されたと考えられる。この仏教寺院址からは別に大量のサンスクリット及びトカラ語写本が発見されているが、同遺跡より発見されたトゥムシユク語文書はこれまで知られていなかった。この断片は表裏両面にブラーフミー文字が書かれているが、トゥムシユク語と判断されるのは片面のみであり、もう片面については言語・内容共に確定できない。トゥムシユク語面の内容は物品の納入に関するものであると考えられ、数詞「四」及びドイツ所蔵文書にも在証される度量衡が見えているが、物品の納入に関する文書は、同寺院址で発見されたトカラ語B文書にも知られている。クチャ地域では既にトゥムシユク語によって書かれた銘文が一点、別の仏教寺院址であるスパシより発見されており、今回発見された文書は零細な断片ではあるが、クチャにおける言語接触やトゥムシユク語使用の問題など、この言語をめぐって歴史的な位置づけを行う上で重要な手がかりを与える。また、本文書が発見されたドゥルドゥル・アクルの遺跡からは、トカラ語B及び漢語による世俗文書が発見されているだけでなく、ソグド語の断片も一点確認されており、唐代クチャ地域の寺院における言語・民族・文化接触に関する事例を提供しており、今後考古学研究による成果も考慮し、総合的な研究を行う必要がある。

新疆ウイグル自治区で発見されたサンスクリット断片はドイツ・フランス・イギリス・ロシア・中国・日本などに所蔵されているが、ドイツ所蔵サンスクリット断片中、トゥムシユク語による書き込みが行間に書かれた断片を一点、発見した。この地域より将来されたサンスクリット断片にトカラ語や古代ウイグル語による書き込みが見られる点は研究者に知られているだけでなく、それらの解読も既に出版されているが、トゥムシユク語による書き込みは指摘された事がなく、初めての事例である。この仏典断片は1950年に出版されていたが、現在に至るまで当該の書き込みに関する情報は一切記載されておらず、研究者には全く認識されていなかった。通常、この種の書き込みは、本文中のサンスクリットの語句に対してトカラ語や古代ウイグル語を注釈として書き込むものであり、当該のトゥムシユク語による書き込みも同様である。このような書き込みは現地の仏教徒がサンスクリット仏典を利用した際に書き込まれたものであると推測される事から、当時の新疆地域における仏僧のサンスクリットのレベルを窺わせる貴重な資料であると言える。また、本断片の発見場所はトゥムシユク地域である事から、トゥムシ

ユク地域の仏教寺院におけるサンスクリット及びトゥムシク語の言語使用の解明という社会言語学の問題を提示する。これまでトゥムシク地域で発見された非漢語資料としてはサンスクリットやトカラ語及び古代ウイグル語が知られており、特にこの地域で発見された一部のトゥムシク語仏典はトカラ語を原典としていただけでなく、世俗文書にもトカラ語よりの借用語が見られる事から、トカラ語の強い影響が指摘されていたが、現在までのところ、この地域から発見されたトカラ語文献は世俗文書に限られており、この地域において仏教言語としてトカラ語が有していた地位には不明確な点が残されている。今後、同地域より将来されたサンスクリット仏典や漢語資料も含めて、社会言語学的な面の解明が待たれる。

(3) トゥムシク語は言語学的には中世イラン語に属しており、特にコータン語と最も近い関係にある点は 1935 年の解読以来指摘されることである。実際、古代イラン語からの音変化や言語構造及び個々の語形については、コータン語が当該言語の解明に際して果たす役割の重要性を示している。しかしながら、コータン語の知識のみでトゥムシク語を解読する事はできず、その他の中世イラン語やイラン語史の知識も必要である。本研究では、トゥムシク語の言語構造に関する研究発表及びトゥムシク語文献の解読に貢献し得る新資料の発掘に関する研究発表を行った。

① 研究代表者は新たに解読したトゥムシク語世俗文書を利用して、当該言語の動詞体系、とりわけ過去時制の体系を整理し、イラン語史の中に位置づける研究を行い、国際学会にて発表を行った[学会発表]。この発表では、トゥムシク語の動詞の過去時制についてはコータン語との差異が従来考えられていたよりも大きい点を指摘した。この発表に際して、専門家より頂いた意見を参考に、現在このテーマの論文を準備中である。

研究協力者である慶昭蓉は、同じ文書資料に見える「東西南北」の方角を表す語彙の比定に成功したが、これらの語彙を他の中世イラン語と体系的に比較し、コータン語と異なる点が見られる点を指摘した[学会発表]。現在、この発表についても論文を準備中である。これら二つの研究は、トゥムシク語のイラン語史全体における歴史言語学的な位置づけが従来想定されていた程単純ではない事を指摘したものであり、音韻変化と併せて、イラン語史における当該言語の位置づけを再検討する必要性を示している。

研究代表者はロシア所蔵トカラ語断片を調査している際、仏教学研究でヴェッサンタラ・ジャータカと称される物語に比定される

トカラ語 B 断片を一点発見し、この断片の位置付けに関する研究発表を行った[学会発表 ①]。従来、この物語に比定されているトカラ語 B 断片としてはベルリンに所蔵される一点のみが知られており、ロシア所蔵の当該断片は全く知られていなかった。この物語については、フランスに所蔵されるトゥムシク語断片三点の存在も知られており、マウエ博士による転写が既に公表されているが、今回発見されたトカラ語 B 断片は、中央アジア地域で流布していた当該の物語の内容を窺わせる新しい資料として価値が高いだけでなく、トゥムシク語断片の研究にも貢献し得る。また、ドイツ所蔵断片の発見場所は、断片に書き込まれたマークによりトゥルファンである事が窺える一方、ロシア所蔵文書には発見場所を示す資料は存在していないが、この二断片は古文書学的特徴の一致から同一の写本に属していた可能性が極めて高く、この推定が正しいならば、ドイツ及びロシアの探検隊は同一写本の離れをそれぞれ入手し、持ち帰った事となる。先行研究では、ドイツ及びロシア所蔵のトカラ語資料の内、研究代表者と研究協力者が発見・出版した、ほぼ同一の内容を示す木簡がそれぞれ一点ずつ知られているが、同一の写本に属する離れの存在は、これが初めての例となり、中央アジア探検隊の歴史的研究に対しても貴重な資料となり得ると同時に、他のロシア所蔵トカラ語資料の発見場所についても手がかりを与える事が予想される。なお、この断片に関しては、現在論文を準備中で、2017 年中に投稿の予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

① OGIHARA Hirotoshi, Kuchean secular documents in the *Pelliot Koutcheen Nouvelle Serie. Tocharian and Indo-European Studies* 16, 2015, pp. 81-105 [査読有]

[学会発表](計 3 件)

① OGIHARA Hirotoshi, New fragment of the *Vessantara-jataka* in Kuchean, 6th International Symposium on Oriental Ancient Documents Studies, 2016 年 10 月 5 日, St. Petersburg (Russia)

OGIHARA Hirotoshi, The injunctive in Tumshuqese. Eighth European Conference of Iranian Studies. 2015 年 9 月 18 日, St. Petersburg (Russia)

Ching Chao-Jung, The four directions in Tumshuqese. Eighth European Conference of Iranian Studies. 2015 年 9 月 18 日, St. Petersburg (Russia)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

荻原 裕敏 (OGIHARA, Hirotoshi)
京都大学・白眉センター・特定准教授
研究者番号：60762135

(4)研究協力者

慶 昭蓉 (CHING, Chao-Jung)